

クリストファー・ドレッサーと 明治政府の高官たち — そのプロソポグラフィを中心に —

川 村 範 子

はじめに

クリストファー・ドレッサー (Christopher Dresser, 1834-1904) は、19世紀後半のイギリスで活躍した工業デザイナーの先駆者として知られている¹。彼はデザインの良否が商況を左右するという信念を持ち、陶器、家具、カーペット、壁紙などイギリス製の日用品のデザイン改革に取り組んだ²。その際、ドレッサーは新しいデザインの発想の源をしばしば東洋に求めた。中でもとりわけドレッサーが影響を受けたのは日本の工芸品であった。

19世紀後半は万国博覧会の時代でもあり、イギリスでも日本の工芸品が広く知られるようになった。ドレッサーの日本に対する関心も、万国博覧会をとおして深まっていった。1862年に開催された第2回ロンドン万博の日本コーナーに展示された当時の駐日英国公使オールコック (Sir Rutherford Alcock, 1809-1897) のコレクションは、ドレッサーを大いに魅了した³。1867年のパリ万博には徳川幕府、薩摩藩、佐賀藩がそれぞれに出品し、そこでもドレッサーは日本の工芸品の繊細な職人芸と優れたデザイン性を高く評価した⁴。さらに1873年のウィーン万博では、政府の指導の下、えり抜かれた工芸品がヨーロッパの人々の注目を集め、ドレッサーもそれらの機能性と美を兼ね備えたデザインを賞賛した⁵。

イギリスで日本のデザインを熱心に研究し続けたドレッサーは、明治10年 (1877) に大望の日本の工芸視察を実現した。来日後間もなく、当時の内務卿大久保利通に面会したドレッサーは、西欧の工芸や海外貿易に精通している点を見込まれ、官費で日本各地の産業を視察することとなった。ド

レッサーは約3ヶ月間の視察旅行をとおして多くの工芸見本や情報を入手し、一方で、日本の産業振興に役立つ助言を与えた。ドレッサーの日本視察旅行の内容については、彼が帰国後に執筆した *Japan: Its Architecture, Art, and Art Manufactures*（1882年出版、以下 *Japan* とする）と⁶、ドレッサーに同行した役人石田為武が内務省に提出した『英国ドクトル・ドレッセル同行報告書』（公文書、1877年、以下『同行報告書』とする）によって詳しく知ることができる。

ドレッサー研究の第一人者ハーレン（Widar Halén）は、19世紀イギリスにおけるデザイン改革とジャパニズムの関係の中でドレッサーが果たした歴史的役割の重要性を論じ、また、日本の公文書からドレッサーと日本の関係を明らかにした⁷。我が国では鈴木博之が19世紀の日本建築史でドレッサーを取り上げた⁸。佐藤秀彦はドレッサーの来日と、その重要な目的の一つであった東京の博物館（現在の東京国立博物館）にサウス・ケンジントン博物館（現在のヴィクトリア・アンド・アルバート博物館）から贈られた寄贈品について詳しく報告した⁹。板橋美也は日本工芸の固有デザインとドレッサーのデザイン観の関係について論じている¹⁰。最近ではドレッサーの知名度が高まりつつあるとは言え、国内外を合わせてもドレッサーに関する研究報告の数はまだ少ないし、ドレッサーと彼が日本で出会った明治政府の高官との関係についても詳しく論じられていない。

本稿の目的は、日本でドレッサーを取り巻いた明治政府の高官たちのプロソポグラフィ（prosopography または collective biography）を示し、そこから得られた基礎情報を基にドレッサー来日の意義を考察することである。Ⅰではドレッサーの来日の経緯について述べ、Ⅱで各高官の基礎情報を提示する。ⅢではⅡで得られた情報を分析する。

Ⅰ．ドレッサーの来日

ドレッサーとは知己の間柄であったサウス・ケンジントン博物館館長フィリップ・オーウェン（Sir Francis Philip Cunliffe-Owen, 1828-1894）は、ドレッサーの日本訪問の計画を知り、その際に東京の博物館に寄贈品を届けるようドレッサーに依頼した。これには次のような事情があった。ウィーン万博終了後、日

本の荷を積んで帰国の途に就いたフランス船が伊豆沖で沈没する事故が起こった。海底に沈んだ荷の中には博覧会事務局副総裁佐野常民が東京の博物館に収めるためにヨーロッパで蒐集した工芸品が含まれていた。佐野と親しい間柄にあったオーウェンはこれを遺憾に思い、その損失を補うために寄贈品を贈ることを決定した¹¹。そして、オーウェンはドレッサーに、寄贈する工芸品の選択から東京での贈呈までを託すことにした。こうしてドレッサーの日本訪問は、サウス・ケンジントン博物館館長の代理として当時内務省の管轄下にあった博物館に寄贈品を収めるという公的な任務を負うことになったのである。

1876年10月6日、ドレッサーはリバプールを出港した。彼は先ずアメリカのフィラデルフィアで開催されていた独立百年記念万国博覧会（以後フィラデルフィア万博とする）を訪問した後、サンフランシスコから横浜に向かった。同年12月26日に横浜港に到着して以来、帰国の途につくまでの約3ヶ月間に、ドレッサーは天皇に謁見を許され、正倉院の宝物を見学し、名所旧跡を訪れ、数多くの製造業及び神社仏閣を視察した。

ドレッサーがこのような待遇を得た背景には次のような経緯があった。彼は来日するとすぐに、オーウェンから託された寄贈品の目録を渡すために佐野常民を訪れた。佐野が受け取った目録にはオーウェンの書簡が添えられており、そこには「ドレッサーは20年来の私の親友であり、美術工芸に精通する博士である。寄贈品のほとんどはドレッサー自身が蒐集し、東京の博物館での陳列も彼自身で行うことを望んでいる。陳列を終えた後は日本各地の視察を願望しているので叶えてやって欲しい」と記されていた。佐野はドレッサーの知識が日本の工芸界に大きな利益をもたらすと考え、オーウェンからの書類一式に佐野自身の書簡を添えて内務省博物局長町田久成に送り、ドレッサーの処遇を託した¹²。

ドレッサーの日本での扱いについて佐野常民か町田久成が内務卿大久保利通に進言したと推測される¹³。大久保はドレッサーに博物館長顧問という称号を与えて、視察旅行の一切の費用を政府で賄うように取りはからった¹⁴。内務省の役人石田為武が視察先にドレッサーを案内し、通訳の坂田春雄とともに常にドレッサーに同行するよう命じられた。このように、ドレッサーの視察旅行は

事実上内務省の管理下に置かれることになったのである。

視察はまず横浜から船で神戸に向かい、そこから淡路島に渡った後、再び神戸から奈良、大阪、京都、伊勢、四日市、名古屋、瀬戸、多治見、岡崎、静岡、箱根を通して横浜に戻り、さらに日光に足を延ばすとう道順を辿った。この間ドレッサーは各地で陶器、織物、金物、木工、紙などの製造業を視察し、多くの工芸品の見本や製法に関する情報を入手した。一方で、ドレッサーは訪れた各地の製造業者に、彼らの製品が海外輸出に適するか否かの点や、新しい産業の可能性などについて多くの助言を与えた。さらに、ドレッサーは奈良の正倉院や京都にある皇室のコレクションを見学するという特別な機会も与えられた。彼は政府の特別な計らいと準備により、寺院建築の装飾部分や古美術品など、興味を持ったものは何でも希望すれば間近で観察することができたのである¹⁵。このように、来日後にドレッサーが明治政府の高官たちと交友関係を築き、彼らの手厚いもてなしを受けることができたのは、ドレッサーを有能な人物として推薦したサウス・ケンジントン博物館館長オーウェンの後ろ盾があったからである¹⁶。

II. ドレッサーが出会った高官たち

本節ではドレッサーが視察旅行中に会った15名の高官を取り上げ、彼らについて次のような事項の情報を提示する。各人の氏名と生没年に続き（A）出身地（B）経歴（C）ドレッサーとの関わり（ドレッサーの *Japan* より引用）（D）情報を収集するにあたって参考にした一次史料（E）二次史料（番号を付けた参考文献欄を本節の最後に示した）。各人に対して複数の文献を使用したのでページ番号の記載は割愛した。人物の記載順序はできるかぎり *Japan* に登場する順序に従った。なお、文中に登場する人名の後ろに番号がある者は本稿で取り上げた人物であるので、その番号の箇所を参照されたい。

①西郷従道〔天保4年－明治35年（1843－1902）〕

（A）薩摩藩

（B）尊皇派であった西郷従道は薩英戦争（1862）、禁門の変（1864）、鳥羽

伏見の戦い（1868）に出征。その後各地で転戦し、出羽秋田で監軍の職に就いた。明治2年（1869）、山県有朋と共に欧米を巡視して先進国の軍制を学び、警察制度や鉄道の自力開設を唱えた。明治5年（1872）に陸海軍両省が設置されると陸軍少輔に就任。明治6年（1873）、兄西郷隆盛らは征韓論に破れ下野したが、従道は政府に留まった。明治7年（1874）に陸軍中將となり、台湾事件が起こると台湾蕃地事務都督として政府の出兵中止を押し出して出兵を断行。明治9年（1876）のフィラデルフィア万博に際し、博覧会事務局副総裁に就任して渡米。明治18年（1885）には海軍大臣に就任、以後歴代の内閣で大臣を歴任した。明治25年（1892）に枢密院顧問、明治27年（1894）には海軍大将となった。明治31年（1898）には元帥府に列した。

(C) ドレッサーはフィラデルフィア万博から日本へ向かう際、従道ら日本の博覧会事務局の一行と申し合わせてサンフランシスコで落ち合い、同じ船で横浜に向かった。横浜港到着後、ドレッサーは従道に招かれて政府の船で上陸（p.2）。12月28日、従道は関沢清明（③）を伴って東京でドレッサーを出迎え、ひとまず自宅に案内した後、佐野常民（②）宅にドレッサーを案内（pp.10-11）。その後、従道と佐野は浅見忠雅（④）を伴ってドレッサーを江戸城へ案内した（p.13）。翌年1月16日に再び従道らはドレッサーを連れて兵器工場や造幣局、湯島聖堂などを訪問（p.43）。ドレッサーが日本を去る4月2日（あるいは3日）には、従道は西南戦争の最中にもかかわらず、ドレッサーを見送るため横浜に駆けつけた（p.212）。

(E) [9] [10] [15] [20] [26] [27]

②佐野常民〔文政5年－明治35年（1822－1902）〕

(A) 佐賀藩

(B) 天保6年（1835）、藩校弘道館の内生に抜擢された。弘化3年（1846）に藩から京都で蘭学と化学の習得を命じられ、嘉永元年（1848）には大坂の緒方塾で洋学を学んだ。嘉永6年（1853）、佐賀藩の精錬方に就任。安政2年（1855）に長崎海軍伝習所で学んだ後、再び精錬方で蒸気機関車模

型や電信機などを試作。文久元年（1861）には海軍取調方付役として蒸気船製造にあたった。パリ万博（1867）に藩の代表として派遣され、その際、軍事や商工業を視察。パリ万博終了後はロンドンを視察し、そこで幕府転覆の知らせを受けた。明治3年（1870）、新政府の兵部省に入り海軍の創設などにあたった。その後工部省に移り、灯台頭としてお雇い外国人リチャード・H・ブラントン（Richard Henry Brunton, 1841-1901）¹⁷とともに灯台建設事業に関わった。明治6年（1873）にはウィーン万博事務局副総裁として渡欧。ゴットフリート・ワグネル（Gottfried Wagener, 1831-1892）¹⁸を博覧会事務局御用係に任じ、ヨーロッパの博物館も調査させた。佐野はウィーン万博の期間中に西欧の知識や技術の習得や海外貿易の販路獲得などに積極的に取り組んだ。明治8年（1875）に元老院議官となり、西南戦争（1877）に際して博愛社（後の日本赤十字社）を設立。明治12年（1879）には河瀬秀治（⑪）等と共に竜池会を発足して初代会頭に就任し、日本固有の美術工芸の保護と奨励、産業の振興に尽力した¹⁹。明治13年（1880）に大蔵卿に就任。翌年開催された第2回内国勸業博覧会では副総裁を努めた。明治25年（1892）には第一次松方内閣で農商務大臣に就任した。

(C) ドレッサーは西郷従道（①）らの案内で佐野常民宅を訪ね、サウス・ケンジントン博物館館長オーウェンからの寄贈品目録と紹介状等を佐野に渡した（pp.11-12）。これらの寄贈品はドレッサーの指示の下、サウス・ケンジントン博物館に倣って東京の博物館に陳列された（p.212）。寄贈に関わるオーウェンとドレッサーの多大な尽力に報いるため、佐野はドレッサーを東京の各名所に案内するなど手厚くもてなしたが、特にドレッサーを喜ばせた出来事は、佐野が自宅に日本画家数人を招き、ドレッサーの前で水墨画の描き方を披露したことであった（pp.58-62）。

(D) (4) (19)

(E) [8] [9] [14] [24] [26] [28]

③ 関沢明清〔天保年 14 - 明治 30 年 (1843 - 1897)〕

(A) 加賀藩

(B) 江戸、長崎に遊学し蘭学を学んだ。藩から留学の密許を得てロンドンで3年余り学んだ後、明治元年(1868)に帰国。明治5年(1872)に正院六等出仕となった。翌明治6年(1873)にはウィーン万博のため渡欧。この時、欧州の水産事情を見学して、日本に漁網の編網機械やサケの人工孵化に関する知識を得た。フィラデルフィア万博(1876)では御用係を命ぜられ渡米。その折、カナダでサケの人工孵化法を調査し、コロンビア州で缶詰製造法を習得。その機械を携えて帰国した。明治10年(1877)には北海道に官営石狩缶詰所を作らせた。また、内務卿大久保利通(⑦)に人工孵化事業の重要性を進言。これが認められて内務省勸農局長松方正義の下で御用掛として水産振興に努めた。翌年、駒場農業学校(東京大学農学部的前身)校長を兼任。明治22年(1889)には水産伝習所(東京水産大学の前身)の初代所長に就任。東京農林学校水産専修科教授などを歴任して、日本の水産技術の開発と普及に尽力した。明治25年(1892)に退官。翌26年に朝鮮沿岸における出稼ぎ漁業の実地調査を行った。

(C) 関沢は12月28日に西郷従道(①)に同行し、東京でドレッサーを出迎えて佐野常民(②)宅に案内した(pp.10-11)。翌年1月6日、東京駅で佐野常民、浅見忠雅(④)等とともにドレッサーを東京都内の名所に案内した(p.13)。ドレッサーは魚の養殖システムの確立に従事していた関沢を、イギリス人にとってのフランシス・バックランド(Francis Trevelyan Buckland, 1826-1880)²⁰だと称した(p.36)。

(D) (12)

(E) [6] [9] [30] [31] [32]

④ 浅見忠雅〔生没年不明〕

(A) 福島県

(B) 内務省勸業寮十等出仕。明治9年(1876)にはフィラデルフィア万国博覧会に事務局翻訳編集係として渡欧。明治14年(1881)に開催された

第2回国内勸業博覧会の審査官を務め、博覧会の報告書作成にも携わった。1880年にサウス・ケンジントン博物館から出版されたフランクス（A. W. Franks）著 *Japanese Pottery* は、塩田真（⑮）による‘A Report on Japanese Ceramics’（発行年不詳）を基に編纂されたが、浅見はこの塩田の報告書の英訳を担当した。

(C) 佐野常民（②）の下で製造業に関する西洋の文献を日本語に翻訳する仕事に従事していた浅見は、佐野や西郷従道（④）がドレッサーを江戸城、兵器工場、造幣局など東京の主要な場所に案内した折、通訳として同行した。

(D) (2) (17)

⑤ 町田久成〔天保9年－明治30年（1838－1897）〕

(A) 薩摩藩

(B) 藩命で江戸の昌平黌で学んだ。26歳で藩の大目付になり、開成所學頭へと累進。慶応元年（1865）、藩命により薩摩藩英国留学生（町田を含め17名）の取り締まりとしてイギリスに密航留学。滞欧中パリ万博（1867）の開会式に薩摩藩使節の一行と共に出席。慶応4年（1868）に帰国し、同年、新政府が誕生すると外国官判事に任ぜられた。明治2年（1869）、外務省が設置されると外務大丞に就任。明治3年（1870）には大学南校に任務し大学大丞となった。明治4年（1871）、廃仏毀釈の影響で荒廃した全国の社寺の宝物を調査。それらを保護するため古器旧物の保護方と集古館建設を太政官に求めた。ウィーン万博（1873）の御用係を命ぜられた。明治6年（1873）には太政官に「大博物館建設の必要性」を建議し、上野山内を博物館と書籍館の建設予定地として提案。また、同年7月には政府の命令で蜷川式胤（⑬）らと共に正倉院以下東海近畿地方の古社寺宝物調査を実施。同年12月には内務省設置に伴い、内務大丞に任ぜられ、内務省に博物館が移されると初代博物館長に就任。フィラデルフィア万博（1876）では博覧会事務局長を務めた。明治15年（1882）、上野に設立された国立博物館の初代館長に就任。しかし、7ヶ月で辞職し、その後任には田中芳男

(⑥) が就いた。明治18年(1885)に元老院議官となったが、この年に辞職。僧になって崇福寺の再興に寄与した。

(C) 町田はドレッサーが来日すると早々に佐野常民(②)、田中芳男(⑥)、関沢明清(③)、浅見忠雅(④)等と横浜に滞在中のドレッサーを訪ね、正倉院見学と天皇謁見を予告した(p.33)。1月末、ドレッサーが奈良を訪れると、彼を東大寺に案内し正倉院の宝物などを披露(pp.93-103)。春日大社の摂社若宮神社にも案内し、神楽を見せた(pp.104-108)。

(D) (4)

(E) [3] [9] [13] [17] [19] [26]

⑥田中芳男〔天保9年－大正5年(1838－1916)〕

(A) 笠松藩

(B) 嘉永3年(1850)、シーボルトに師事する名古屋の伊藤圭介²¹の弟子となり、本草学や蘭学を学んだ²²。文久元年(1861)、蕃書調所出役に命ぜられた伊藤に従って江戸に出向き、翌年、同所の物産学出役に就任。パリ万博(1867)では日本産の昆虫標本を出品する大役を任され、田中が準備した昆虫標本は銀牌を授与された。渡仏の折、パリの王立植物園と動物飼育展示場などを見学。また、パリで薩摩藩の町田久成(⑤)らと知り合い、維新後、彼らの紹介により大久保利通(⑦)を知った。明治元年(1868)より大阪舎密局御用係として派遣されたが、明治3年(1870)に大学南校出仕を任せられ帰京。翌年、文部省が設置されると文部省に移された博物館の小教授として招かれた。ウィーン万博(1873)の御用係として渡欧。その折、各地の美術館、図書館、博物館、学校などを視察し、ビール工場や石膏型製作所などで実地指導を受けた。明治7年(1874)、内務省の勸業寮出仕を兼任し、合わせて博物館掛を命ぜられた。1876年のフィラデルフィア万博でも御用係を務め、アメリカ滞在中は博物館や動物園を視察したほか、葡萄酒の醸造法を見学。また、関沢明清(③)とともにサケ、マスの人工孵卵の状況を調査した。明治10年(1877)、内務権大書記官となり、内務卿大久保利通(⑦)が建議して開催されることとなった内国勸

業博覧会に向け諸準備に尽力。明治14年（1881）、新設された農商務省の農務局長となり、翌年、上野の博物館の初代館長町田久成の後任として館長に就任。さらに、日本最初の農業博物館、伊勢神宮農業博物館の創立（1891）にも貢献した。

(C) 明治10年1月20日、田中は天皇に謁見するドレッサーを仮御所に案内。謁見の際、通訳の坂田春雄（⑨）はドレッサーに同伴したが、田中は隣室で待機した（pp.51-53）。

(D) (13) (14)

(E) [9] [14] [22] [25]

⑦大久保利通〔天保元年－明治11年（1830－1878）〕

(A) 薩摩藩

(B) 弘化3年（1846）から藩記録所に出仕。西郷隆盛と共に革新派の青年たちの集まりである精忠組を組織。公武合体運動を進め、慶応2年（1866）には薩長連盟の締結に関わった。岩倉具視と共に討幕派の中心にあり、新政府を樹立した後は明治2年（1869）に参議となり、東京遷都、版籍奉還、廃藩置県などの改革を成功させた。明治4年（1871）に大蔵卿に就任。同年より明治6年（1873）3月まで岩倉遣外使節団の副使として欧米を巡回。帰国後は内治優先を唱え、征韓論に強く反対して西郷隆盛等と決裂。明治7年（1874）には内務省設立に伴い内務卿に就任し、海外貿易の発展、内国勧業博覧会の開催などを次々と建議して殖産興業を進めた。その一方で、自由民権運動、不平士族の反乱、百姓一揆などを抑えた。明治10年（1877）に西南戦争に勝利した後には地方議を開き、郡区町村編制法、府県会規則、地方税規則の三大案を議定した。1878（明治11）年、石川県士族島田一郎らによって暗殺された。

(C) ドレッサーは来日して間もなく当時の駐日英国公使ハリ－・パークス（Sir Harry Parkes, 1828-1885）と共に大久保利通を訪ね、日本の工芸について話し合った。大久保はドレッサーに日本の海外輸出の可能性について工芸品の調査を依頼（p.40）。ドレッサーに博物館長顧問の称号を与え、3ヶ

月間の滞在費を政府で賄い、国内を自由に移動できる許可を与えた (p.67)。加えて、天皇への謁見や東大寺正倉院の宝物調査がかなうように取りはからった。ドレッサーは帰国後、寄贈品搬入と工芸調査に対する大久保からの礼状を受け取った (p.41, pp.214-215)。

(D) (11)

(E) [2] [5] [7] [15] [21] [26]

⑧石田為武 [天保8年 - 明治12年 (1837 - 1879)]

(A) 佐賀藩

(B) 漢籍、蘭学を学び、伊万里の副軍令兼陶業監督官を務めた。明治5年(1872)に博覧会事務局八等出仕となり、同年6月、ウィーン万国博覧会(1873)の御用係としてお雇い外国人ゴットフリート・ワグネルに同行して京都を視察。翌年はウィーン万博に赴いた。明治8年(1875)、内務省勸業寮八等出仕に任ぜられ、博物館係となった。明治9年(1876)にはフィラデルフィア万博(1876)のため渡米。翌年1月から約3ヶ月間ドレッサーの視察旅行の案内役を務めた。この間、ドレッサーの所見を詳細に記録するように命ぜられ、視察終了後に記録をまとめて『石田為武筆録 英国ドクトルドレッセル同行報告書』として内務省に提出。その後、博物局事務取扱、パリ万国博覧会(1878)出品事務取扱補助、工芸科長心得、内国勸業博覧会審査員を務めた。明治12年に病死。

(C) 石田はドレッサーの視察旅行の案内と会計など公務を受け持った (p.63)。ドレッサーは石田を漆器の目利きだと称し、石田の工芸に対する造詣の深さを評価した (p.349)。しかし、ドレッサーは旅行中、石田によって彼の言動が詳細に記録されていたことには気づかず、帰国後に日本から送られてきた石田の『同行報告書』の英訳文を受け取って初めてそのことを知った (p.224)。

(D) (3) (7)

(E) [16]

⑨坂田春雄〔1849 - 1915（嘉永元 - 大正4）〕

(A) 佐賀藩

(B) 大隈重信に随ってパリ万博（1867）を視察。ウィーン万博（1873）には事務官随員として渡欧し、イギリスで開催中のロンドン万博に出張した²³。日本からこの博覧会に赴いた役人武田昌次及び富田淳久と随行員坂田は、博覧会終了後に展示品の処理などでドレッサーとサウス・ケンジントン博物館のオーウェンの助力を得た。坂田は博覧会終了後、自費でロンドンに留まり、王立鉱山学校（the Royal School of Mines）で学んだ。1875（明治8）年に帰国。翌年ドレッサーが来日すると通訳を命ぜられた。石田為武と共にドレッサーの日本視察旅行の全行程に同行。1879（明治12）年には内務省勸業寮出仕となり、シドニー博覧会（1880年）、及び翌年の内国勸業博覧会には御用掛に任ぜられた。明治16年（1883）年には佐野常民や河瀬秀治等が発足した竜池会の委員に選定された。明治17（1884）年に農務省書記官に、次いで上野博物館副館長に就任。官職を退いた後は東京醤油、愛知セメント各株式会社取締役役に就任。

(C) ドレッサーはロンドンに滞在中の坂田を自宅に招いたほど二人は懇意な間柄であった（p.50）。ドレッサーと坂田は田中芳男（⑥）の案内で天皇謁見のため仮御所に向かった。謁見の際、坂田は通訳としてドレッサーに同席した（pp.50-53）。

(D) (3) (8) (9)

(E) [22]

⑩鮫島尚信〔弘化2年 - 明治23年（1845 - 1880）〕

(A) 薩摩藩

(B) 藩校造士館で漢学を修め、次いで蘭学を修めた。文久元年（1861）、オランダ医学研究生として長崎に遊学、その傍ら英語塾培社の瓜生寅^{うりゅうはじめ}（1842-1913）に英学を学んだ。帰藩後、薩摩藩開成所の訓導師となった。慶応元年（1865）、薩摩藩留学生として町田久成（⑤）等とイギリスに留学。ロンドン大学のウィリアムソン教授の世話により同大学のユニバーシティカ

レッジに入学し、主として英文学を学んだ。慶応2年（1866）の夏休みに、かつて日本の英国公使館の第一書記官ローレンス・オリファント（Laurence Oliphant, 1829-1888）に伴われ、吉田清成（1845-1891）と共にアメリカを訪問。宗教共同体「新正社」を創立したトマス・レーク・ハリス（Thomas Lake Harris, 1823-1906）に出会い感化を受けた。慶応3年（1867）に森有礼（1847-1889）らと再び渡米して「新正社」に入り、ぶどう園で働きながら学んだ。明治元年（1868）、日本の新政府樹立の報が伝わると、ハリスの勧めで森と共に帰国。同年7月に徴士外国官吏判事に、さらに議事体裁に任ぜられ、翌年には東京府判事、権大参事に就任。明治3年（1869）には外務大丞、次いで駐英、仏、独、北連邦少弁務使に任ぜられ、フランス在勤となった。中弁務使、弁理公使から明治6年（1873）には特命全権公使となり、明治8年（1875）に帰国。明治11年（1878）まで寺島外務卿のもとで外務大輔を務めた。同年1月、駐仏特命全権公使に任ぜられ、その後ベルギー、スペイン、ポルトガル、スイスの公使を兼任した。博物館建設に関して、陳列用のヨーロッパ紙幣収集や、フランスの美術館・博物館の設計図入手という命を政府から受け尽力した。

(C) ドレッサーは横浜から神戸へ向かう船中で鮫島と出会い、日欧貿易の可能性について長時間にわたって話し合った。彼らはパリ万国博覧会（1878）で再会し、以後鮫島がフランスで客死するまで交友関係にあった（p.65）。

(E) [12] [26]

⑪河瀬秀治〔天保10年－明治40年（1840－1907）〕

(A) 宮津藩

(B) 嘉永5年（1852）から漢学を学び、20歳で甲州流軍学山鹿伝の免許相伝を受けるなど武芸の研究にも専心したが、時勢に合わせて西洋流の兵学も研究した。慶応4年（1868）1月の鳥羽伏見の戦いで、宮津藩が朝敵の汚名を蒙って討伐の対象になっていることを知り、藩主不在のまま尊皇の大儀を唱えて政府軍に陳謝し、藩の危機を救った。明治2年（1869）新政

府のもとで武蔵県令（知事）に任ぜられ、その後、小菅、印旛、群馬、入間、熊谷等の各県令を歴任。群馬県令兼入間県令に就任した折には、洋式製糸工場を建設して製糸の改良を試み、桑田の開墾を奨励して養蚕の発展を促した。明治7年（1874）に内務省に入り、内務大丞兼勸業寮権頭に就任。フィラデルフィア万博（1876）の事務官長を務めた。明治9年（1876）、内務省勸商局分離に伴い勸商局長となった。翌年1月、内務大書記に就任。第1回国内勸業博覧会（1877）の事務官長、パリ万博（1878）の御用係を務めた。明治11年（1878）の内務省勸商局廃止に伴い、その事務は大蔵省商務局に移され、河瀬は大蔵省に転属して大蔵大書記官を務めた。翌年、佐野常民（②）等と共に竜池会（後の日本美術協会）を発足した。メルボルン万博（1880）に事務官長として渡航。その際、アメリカとイギリスを視察した。同年、渋沢栄一（1840-1931）や五大友厚（1835-1885）等とともに日本最初の商工会議所である東京商法会議所を結成。明治14年（1881）に退官し、翌年には横浜正金銀行取締役就任。明治17年（1884）頃に竜池会から分かれて鑑画会を発足し、美術工芸の奨励と産業の育成に努めた。鑑画会の発足は明治21年（1888）の東京美術学校設立につながり、翌年、文部省より東京美術学校商議員を嘱託された。

(C) 河瀬は当時京都府権知事であった榎村正直（⑫）と共に、京都を訪れたドレッサーを勸商場などに案内し、京都の産業を紹介した。さらに一般公開されていない皇室の所蔵品をドレッサーに見せた（pp.150-153）。ドレッサーが京都で天皇の宝物や珍しい品物の写真撮影ができたのは河瀬の尽力による（p.331）。河瀬はドレッサーの帰国後、明治13年（1880）に渡英した折、ドレッサーが来日時に与えた賢明な提案が日本の工芸と産業の奨励に大いに役立ったと書き記した手紙を添えて、日本から持参した漆器をドレッサーに贈った（p.353）。

(D) (5) (6) (19)

(E) [4] [11] [15] [26]

⑫ 榎村正直〔天保5年－明治29年（1834－1896）〕

(A) 長州藩

(B) 明治元年（1868）に上京し、京都府に出仕して議政官試補となり、次いで徴士議政官史官となった。翌年、権弁事を経て、京都府権大参事に就任。この年、全国に先駆けて学区制による小学校を設立。明治4年（1871）には京都府大参事に任ぜられた。京都近代化政策の一環として産業振興の中枢機関となる勸業場を旧長州藩邸に設置。勸業場の周辺には栽培試験場、舎密局、織殿、製革場などの施設を置いた。また、同年10月には京都博覧会を開催。明治5年（1872）、衰退していた西陣織の立て直しを図り、技術習得と新鋭織機械購入のために3人の西陣職工を織物先進国フランスへ派遣。現地で購入したジャカード織機やその他の新鋭機械は2年後に西陣に到着し、新しい技術の指導が始められた。明治8年（1875）には京都府権知事に、1877（明治10）年には京都府知事に就任。女紅場（女子の技芸学校）、図書館、病院を設立し、種痘や梅毒の検査と治療等の医事に着手するなど、新文化の導入にも積極的に取り組んだ。明治14年（1881）、元老院議官に転じ、後に行政裁判所長官などを歴任した。

(C) 榎村は河瀬秀治（⑪）と共に、京都を訪れたドレッサーを勸業場などに案内し、彼らが皇室の所蔵品を見学した際も同行した。ドレッサーは勸業場で様々な製品を調査し、織殿では伝統的な西陣織と新しく導入されたジャカード織の作業を視察した（pp.150-153）。

(E) [1] [26]

⑬ 蟻川式胤〔天保6年－明治15年（1835－1882）〕

(A) 京都

(B) 若い頃から古器旧物を研究し、各地の重宝を巡察。幕末期には社寺旧家の什宝を調査研究した。明治2年（1869）、新政府の要請により出仕して制度局取調御用係となり、明治4年（1871）、外務省に移り外務大録に任ぜられ、文部省博物局御用係を兼任。田中芳男（⑥）等と東京九段坂で物産会を開催し、翌明治5年（1872）には町田久成（⑤）等と文部省主催

の展覧会を湯島聖堂で開催。また、近畿地方の社寺の宝物調査を行い、この間、正倉院の開封に立ち会い宝物調査を行った。同年、文部省八等出仕となり、明治8年（1875）には内務省博物館係となった。明治10年（1877）、病により職を辞した。

(C) ドレスラーの日本滞在終了間近の3月末、東京の博物館（東京国立博物館の前身）にて蜷川はドレスラーに古い土器や茶碗などを見せ、それらの由来などを解説した（p.195）。

(D) (16)

(E) [19] [29]

⑭松方正義〔天保6年－大正13年（1835－1924）〕

(A) 薩摩藩

(B) 少年期に父母を失い、赤貧の中で武術に励み経学を修めた。勘定所出物問合方、大番当座書役を務め、藩主島津忠義に認められ、大久保利通（⑦）に知られるところとなった。藩主の父久光の信任を得て、小納戸勤役に登用された。慶応2年（1866）の第二次長州征伐に監軍として出陣。明治元年（1868）、旧幕府直轄領に日田県が設置されると大久保利通の推挙を受けて知事に就任。水利、築港事業や殖産興業のための金融機関を設置し、これらの体験をもとに中央政府に多くの建言を行った。明治4年（1871）、再び大久保の推挙により大蔵省権大丞となった。明治7年（1874）には大蔵三等出仕兼租税頭に昇進し、特に地租改正事業の官制に尽力した。翌年、大蔵大補となり、明治9年（1876）には内務省勸業頭を兼務し、勸農局長も務めた。パリ万博（1878）事務局副総裁に任ぜられた。明治13年（1880）に内務卿に、翌年には参議兼大蔵卿に就任。明治14年（1881）の第2回内国勸業博覧会で副総裁を務めた。その後、明治18年（1885）に改めて大蔵大臣となり、明治21年（1888）には内務大臣、明治24年（1891）には内閣総理大臣兼大蔵大臣となった。伊藤博文の内閣を挟んで、明治29年（1896）に松方は再び総理大臣に就任した。

(C) 松方はドレスラーの日本滞在も終わりに近い頃、東京でドレスラーに

紹介された。ドレッサー帰国の翌年、松方はパリ万博（1878）で審査員を務めていたドレッサーと再会。博覧会后、各国を視察した松方にドレッサーはイギリスの主要な産業を紹介しする機会を得た（p.196）。

(E) [9] [22]

⑮塩田真²⁴〔天保8年－大正6年（1837－1917）〕

(A) 対馬藩

(B) 工部省に出仕。佐野常民（②）に見出されて、ウィーン万博（1873）の一級事務官となり渡欧。明治8年（1875）には内務省博物局工芸科長を任ぜられ、フィラデルフィア万博（1876）にも事務官として渡航した。また、内国勸業博覧会の審査員をたびたび務めるなど、明治の博覧会事業に大いに貢献した。明治10年（1877）に納富介次郎（1844－1918）と東京小石川に江戸川製陶所を設立し、技術指導に従事した。明治11年（1878）から河瀬秀治（⑩）等と美術工芸品評会を開き、翌年これを竜池会と改称した。明治13年（1880）にサウス・ケンジントン博物館から出版されたフランクス（A. W. Franks）著 *Japanese Pottery* は、塩田による ‘A Report on Japanese Ceramics’（発行年不詳）を基に編纂された。明治19年（1886）には『府県陶器沿革陶工伝統誌』の編纂に携わった。明治29年（1896）、新設された農商務省商品陳列館の館長に就任。パリ万博（1900）の臨時博覧会事務評議員としてフランスに派遣。明治36年（1903）に韓国政府美術顧問を囑託され、後に東京美術学校囑託員となった。

(C) ドレッサーが日本を離れる前夜、佐野常民（②）、石田為武（⑧）、坂田春雄（⑨）等と共にドレッサーと別れの晩餐をとった（p.212）。

(D) (10) (17) (18) (19)

(E) [15] [18] [22] [23]

<プロソボグラフィの参考文献>

一次史料

(1) Dresser, Christopher., *Japan-Its Architecture, Art, and Art Manufactures*

- （ Longmans, Green, and Co., 1882 ）.
- （2） Franks, A. W., *Japanese Pottery* (1880).
- （3）『石田為武筆録 英国ドクトルドレッセル同行報告書』（内務省、1877）。
- （4）「英国サウス・ケンシントン博物館長ノ英国及欧州諸国芸術品寄贈ニ関スル報告書：町田博物局長宛 / 元暎国博覧会事務局副総裁佐野常民」（1876、早稲田大学図書館古典籍総合データベース、<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>）。
- （5）河瀬秀治、「勸業論」（1878、早稲田大学図書館古典籍総合データベース、<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>）。
- （6）_____「美術会の今昔」『日本美術』（日本美術社、1905）。
- （7）「故石田為武へ祭菜料下賜」『太政類典・第三編・第七卷・官規・賞典恩典二』（1879）。
- （8）「佐賀県士族坂田春雄帰朝」『太政類典・第二編・第一百七十二卷・産業二十一・展覽場四』（1875）。
- （9）「坂田春雄第二回内国勸業博覧会事務官」『太政類典・第四編・第二十八卷・産業・工業』（1880）。
- （10）塩田真（編）『工藝叢談』（塩田真、1880）。
- （11）篠田正作『日本新豪傑伝』（偉業館、1892）。
- （12）関沢明清『朝鮮近海漁業ニ関スル演説』（熊本小次郎、1893）。
- （13）田中芳男（訳）、『泰西訓蒙図説』（文部省、1871）。
- （14）_____平山成信（編）『澳国博覧会参同記要』（1897）、復刻版（フジミ書房、1998）。
- （15）『日本現今人名辞典』（日本現今人名辞典発行所、1900）。
- （16）蜷川式胤『観古図説』（1878）。
- （17）農商務省『第二回内国勸業博覧会報告書』（農商務省博覧会掛、1883）。
- （18）農務局、工務局（編）『府県陶器沿革陶工伝統誌』（有隣堂、1885）。
- （19）『竜池会報告・第一号』（非売品、1883）。

二次史料

- [1] 明田鉄男『京都を救った豪腕知事：横村正直と町衆たち』（小学館、2004）。
- [2] 安藤哲『大久保利通と民業奨励』（御茶の水書房、1999）。
- [3] 井上章一『法隆寺への精神史』（弘文堂、1994）。
- [4] 白井勝美他（編）『日本近現代人名辞典』（吉川弘文館、2001）。
- [5] 落合功『大久保利通 一 国権の道は経済から』（日本経済評論社、2008）。
- [6] 影山昇「関沢清明と村田保 ー ふたりの大日本水産会水産伝習所長」『放送教育開

- 発センター研究紀要第12号』（1995）、pp.63-98。
- [7] 勝田孫弥『大久保利通伝』（同文館、1911）。
 - [8] 河村健太郎『佐野常民伝』（川副町教育委員会、1972）。
 - [9] 『国史大辞典』（吉川弘文館、1979-1997）。
 - [10] 西郷従宏『元帥西郷従道伝』（芙蓉書房出版、1997）。
 - [11] 斎藤一暁『河瀬秀治先生傳』（大空社、1994）。
 - [12] 鮫島文書研究会（編）『鮫島尚信在欧外交書簡録』（思文閣出版、2002）。
 - [13] 史談会（編）『史談会速記録』（原書房、1974）、復刻原本（1915～1916）。
 - [14] 椎名仙卓『明治博物館事始め』（思文閣出版、1989）。
 - [15] 『新潮日本人名辞典』（新潮社、1991）。
 - [16] 鈴木博之（吉田光邦編）「クリストファー・ドレッサーと日本」『万国博覧会の研究』（思文閣出版、1986）。
 - [17] 関秀夫『博物館の生 ― 町田久成と東京帝室博物館』（岩波書店、2005）。
 - [18] 東京国立博物館（編）『温知図録』（東京国立博物館、1997）。
 - [19] _____『東京国立博物館百年史』（第一法規出版、1973）。
 - [20] 豊田穰『西郷従道 ― 大西郷兄弟物語』（光人社 NF 文庫、1995）。
 - [21] 日本史籍協会『大久保利通文書』東京大学出版会、復刻版、5、6、7巻（1968、1969、1982）。
 - [22] 『明治人名辞典』（日本図書センター、1987）。
 - [23] 花井久補「<美術品>から<日用品>へ ― 明治十八年繭糸織物陶磁器共進会」『近代陶磁』第10号（近代国際陶磁研究会、2009）。
 - [24] ブラントン、リチャード・H（徳力真太郎訳）『お雇い外人の見た近代日本』（講談社、1986）。
 - [25] みやじましげる編『田中芳男伝 ― なんじゃあもんじゃあ ―』（大空社、2000）。
 - [26] 『明治維新人名辞典』（吉川弘文館、1981）。
 - [27] 安田直『西郷従道』（国光書房、1902）。
 - [28] 吉川龍子『日赤の創始者 佐野常民』（吉川弘文館、2001）。
 - [29] 米崎清実（蛭川式胤原著）『奈良の道筋』（中央公論美術出版、2005）。
 - [30] 和田穎太『鮭と鯨と日本人 ― 関沢清明の生涯』（成山堂書店、1994）。
 - [31] _____「サケマス人工孵化ことはじめ」『文藝春秋』7月号（文藝春秋、1980）。
 - [32] _____「近藤真琴と関沢明清」『図書』10月号（岩波書店、1987）。

Ⅲ．ドレッサーと官僚たちの相互関係

本節では、Ⅱのプロソポグラフィーから読み取ることができる特徴をまとめることにする。まず、Ⅱで取り上げた明治政府の高官15名について、ドレッサーが来日した頃の状況をいくつかの項目に分類し整理してみると、次のようになる。

① 年齢	20歳代1名、30歳代6名、40歳代6名、50歳代1名
② 出身地	薩摩藩5名、佐賀藩3名、加賀藩、福島藩、笠松藩、宮津藩、長州藩、京都、対馬藩各1名
③ 蘭学と洋学修学者	6名
④ 幕末に渡欧した者	6名
⑤ 内務省関係者	11名
⑥ 万国博覧会関係者	11名
⑦ 竜池会関係者	6名
⑧ 博物館関係者	5名

表中の①からはドレッサーが日本で交流を持った官僚たちのほとんどがドレッサーと同年代の30～40歳代であったことがわかる。②の出身地は薩摩藩と佐賀藩が合わせて全体の半数にのぼる。これは、⑥からわかるように、これらの高官の中には万国博覧会経験者が多いことにも関連している。1867年のパリ万博は日本が初めて自主的に参加した国際博覧会であったが、幕府、薩摩藩、佐賀藩がそれぞれに出品した。パリ万博に関わった幕府の御用掛田中芳男、佐賀藩出身の佐野常民、坂田春雄、及び薩摩藩出身の町田久成は維新以後の博覧会事業にも従事した。

③の7名は蘭学を学んでから洋学へ進んだ者、あるいは蘭学か洋学のいずれかを学んだ者を含み、④は幕末に欧米留学したか、あるいは幕末のパリ万博に参加した者の数を示す。③と④の2項目から彼らの多くが幕末よりすでに西洋に関する知識や技術の集積を始めていたことがわかる。

⑤は15名中11名が内務省に属していたことを示し、彼らの多くは内務卿大

久保利通をはじめ勸業寮頭松方正義、勸商局長河瀬秀治、勸業寮出仕田中芳男等、それぞれに指導的な役割を果たした中心人物であった。殖産興業を推進して富国をめざしていた大久保は、ドレッサー来日直前の明治8年には太政大臣三条実美に、開港以来海外輸出の利益をほとんど占有している外国商社との競争に勝つために、政府は民間会社に補助金を与えて支援する必要があると建議した²⁵。この点からも、西洋の工芸に精通したドレッサーの来日は、政府が西洋の需要を把握する上で、まさに時宜にかなったものであった。

⑥の博覧会関係者の中には、ウィーン万博で博覧会事務副総裁を務めた佐野常民、フィラデルフィア万博の総裁大久保利通及び副総裁西郷従道、パリ万博の総裁松方正義という重要な立場にあった者が含まれている。また、万国博覧会が開催されるたびに二度三度と博覧会場に向いた者も多い。彼らは万国博覧会をとおして海外輸出の販路拡大に取り組み、その一方で西洋の制度や先進技術を学び、日本に持ち帰った。

⑦の竜池会はドレッサーの帰国後間もない明治12年(1879)に、日本の美術と産業の振興を望む有志が集まって発足させた美術団体である。ドレッサーと接触を持った官僚の中の何人かが竜池会の活動に関わり、特に創立メンバーであり会頭を務めた佐野常民や河瀬秀治、塩田真らは会の中心的な人物であった²⁶。竜池会が発行した会誌『竜池会報告』とともに会員の手に送られた『大日本美術新報』には、視察旅行中のドレッサーの助言が「工業上の三弊害」として取り上げられた²⁷。

⑧の博物館関係者の中に含まれる町田久成は上野の博物館(現在の東京国立博物館)初代館長を務め、田中芳男は二代目館長であった。彼らに加え佐野常民、嵯峨式胤は上野の博物館建設に関わった重要人物である。後に坂田春雄も副館長に就任している。

おわりに

日本の博物館への寄贈品を携えて、イギリスの工業デザイナー、クリストファー・ドレッサーが来日したのは明治維新から10年が経とうとしていた時であった。この間、明治政府は西欧文明を取り入れながら、ひたすら近代国家

建設に向けて邁進してきた。しかし、急激な社会変化に国内は混乱し、工業も商業も未だ発展せず、民衆の政府への不満が高まっていた。来日したドレッサーが会った政府の高官たちは、国内を安定させ、新たな制度を築き、殖産興業により富国を図るという急務を負っていたのである。

本稿で示したプロソボグラフィが表すように、ドレッサーが会った高官たちの多くは歴史的に重要な役割を果たした人物であった。彼らは国内外の博覧会や博物館建設事業、製糸、織物、陶器、水産などの殖産興業の推進に取り組んだ。中でも政府の最高権力者内務卿大久保利通との出会いは、ドレッサーにとって幸運な出来事であった。大久保の計らいでドレッサーの視察旅行を内務省が取り仕切ることとなり、その結果、ドレッサーは数多くの製造業と神社仏閣を訪れ、当時の工芸界が置かれていた状況や、従来西欧で評価されていなかった日本の建築について詳細な情報を集めることができた。そして、彼は美術工芸や建築に関する日本の研究書 *Japan* を帰国後に出版するという成果を上げたのである。

一方、大久保はドレッサーを単にイギリスからの客人として厚遇しただけではなかった。もともとドレッサーの来日の目的であった日本の工芸調査を、内務省の殖産興業政策の一環に組み込み、日本が目指す海外輸出拡大への助言をドレッサーから引き出したのである。

このように、ドレッサーの *Japan* とプロソボグラフィを照らし合わせて見た結果、ドレッサーを取り巻いた高官たちが、幕末以来、海外留学や万国博覧会への出張をとおして、西洋から知識や技術を学ぼうとしてきた姿が浮かび上がった。彼らにとって万国博覧会は科学技術や文化、芸術とあらゆる文明への開かれた窓であった。西洋の美術工芸や海外貿易に精通したドレッサーもまた、彼らにとって文明に開かれた窓であったと言えよう。彼らの当時の活動と、それぞれの相互関係を把握することは、日本におけるドレッサーの歴史的役割に対する理解をより深めるものとなる。

注

- 1 Christopher Dresser, 'Eastern art, and Its influences on European manufactures and taste', *Journal of the Society of Arts* (February, 6, 1874), pp.211-221. ドレッサーの主な研究書: Widar Halén, *Christopher Dresser: a pioneer of modern design*, (Phaidon,1990); Harry Lyons, *Christopher Dresser: The People's Designer 1834-1904* (Antique Collections' Club, 2005); Stuart Durant, *Christopher Dresser* (Academy Edition, 1993); Michael Whiteway, ed. *Christopher Dresser: A Design Revolution* (V & A Publication, 2004);『クリストファー・ドレッサーと日本』(「クリストファー・ドレッサーと日本展」カタログ委員会、2002)。ドレッサーの経歴についてはこれらの研究書を参考にした。併せて拙稿「クリストファー・ドレッサーの再評価－忘れられた「最初の」工業デザイナー」『化学史研究』第35巻、第1号 (No.122) (化学史学会、2008)、pp.1-17;「クリストファー・ドレッサーの『装飾デザインの原理』－明治のデザイン教育への影響」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第11号 (2010)、pp.25-47も参照されたい。
- 2 ドレッサーは美には商業的価値があると説いた。Christopher Dresser, 'Hindrances to the progress of applied art', *Journal of the Society of Arts* (April, 12, 1872), p.435; *Principle of Design* (Cassell Petter & Galpin, 1873), p.1.
- 3 ドレッサーは彼の日本の美に対する愛情が、オールコックによって展示された日本の工芸品との出会いから始まったと、オールコックに対して感謝の意を表した。Christopher Dresser, 'The art manufactures of Japan from personal observation', *Journal of the Society of Arts* (February, 1, 1878), pp.169-178. 日本に送られたこの原稿は「日本工芸実見説」と題されて『勸商雑報』第9号から14号 (1878) に掲載された。これと石田為武の報告書の比較について、拙稿「クリストファー・ドレッサーの見た明治初期の陶磁器業」『近代陶磁』第10号 (2009)、pp.17-24を参照されたい
第2回ロンドン万博の日本の出品に関しては、宮内丞「第2回ロンドン国際博覧会と日本の出品物について」『九州芸術工科大学一般・基礎教育系列研究論集4』、(1979) pp.41-108が詳しい。
- 4 ドレッサーは美術工芸の専門書 *The Chromolithograph* にパリ万博の出品作品について10回にわたり連載記事を掲載した。その中でたびたび日本の展示品を取り上げている。'Paris Exhibition', *The Chromolithograph: a journal of art, decoration, and the accomplishments* (Nov. 23, 1867~Feb. 15,1868), pp.12-13, 18-19, 36-37, 51, 82-83, 97-98, 112-113, 125-126, 138-139,154-156, 178-179.
- 5 ウィーン万博に出品された日本の工芸品に関してドレッサーは以下の記事に所見を述べている。Christopher Dresser, 前掲書 (注1、1874); 'A retrospective glance at the Vienna exhibition, and a few thoughts about it', *The Furniture Gazette* (Mar. 21, 1874).

- 6 Christopher Dresser, *Japan: Its Architecture, Art, and Art Manufactures* (London; Longman, Green & Co., New York; Scribner & Welford, 1882, Reprint : Kegan Paul, 2001, Braithwaite Press, 2009). なお、ドレッサーの日本視察旅行について、拙稿「クリストファー・ドレッサーと『日本』—明治初期の陶磁器業—」『近代陶磁』第9号2008、pp.45-66（Japanの一部抄訳）と、‘Encounter with Early Modernization :Christopher Dresser and Japan in the Meiji Period’『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』2008、pp.209-235も併せて参照されたい。
- 7 Widar Halén の博士論文：‘Christopher Dresser and the Cult of Japan’（unpublished, Oxford, 1988）、及び前掲書（注1、1990）。
- 8 鈴木博之「Christopher Dresser と日本」『日本建築学会論文報告集』第226号（1974）、pp.85-94；「クリストファー・ドレッサーと日本」吉田光邦編『万国博覧会の研究』（思文閣出版、1986）。
- 9 佐藤秀彦「クリストファー・ドレッサーとジャポニスム—陶磁器に見る日英交流」『鹿島美術財団年報』（18別冊、鹿島美術財団編、2000年度版）、pp.125-143；「クリストファー・ドレッサーの来日と英国の寄贈品」『郡山市立美術館研究紀要』第2号（2001）、pp.11-51；「クリストファー・ドレッサーと正倉院宝物」『郡山市立美術館研究紀要』第5号（2006）、pp.1-19。
- 10 板橋美也「デザイン「原理」と固有一ドレッサーが描いた日本の美術・工芸をめぐって—」『年報—地域文化研究』第7号（東京大学大学院総合文化研究科、2003）、pp.48-68。
- 11 この件については以下を参照のこと。「英国サウスケンシントン博物館館長ノ英国及欧州諸国芸術品寄贈ニ関スル報告一町田博物局長宛 / 元澳国博覧会事務局副総裁佐野常民」『大隈重信関係資料』（1876、早稲田大学付属図書館古典籍総合データベース：<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>）。
- 12 オーウェンと佐野の手紙の内容については同上報告書（注11）を参照のこと。
- 13 ドレッサーに同行した民間人濱田篤三郎によれば、ドレッサーが政府要人に日本固有の美術の保護と奨励を勧告したのを受けて、内務卿大久保がドレッサーに日本古来の工芸品の評価・選択を依頼したという。篠田正作「濱田篤三郎君」『日本新豪傑伝』（偉業館、1892年）、pp.54-60。
- 14 「英国博物館長より物品寄贈候に付右委托を受渡来候ドクトルドレッセル氏接遇方等の儀に付伺」（『公文録、明治十年、第三十六巻、内務省伺二』、1877）；「英国博物局長ヨリ我博物館へ物品寄贈ニ付附托人接遇」『太政類典、第二編、第百六十九、産業十八、展覧場一』（1877）。
- 15 Christopher Dresser, 前掲書（注6、1882）、p.63。

- ¹⁶ Christopher Dresser, 前掲書 (注 6, 1882)、p.12.
- ¹⁷ リチャード・H・プラントンはイギリスの土木技師で、明治元年に政府雇いの主任灯台技師として来日して以来、9年間に30余りの主要な灯台を建設し、日本の灯台システムを確立した。
- ¹⁸ ワグネルは1868年に長崎における石鹼製造所設立の技術指導のため来日したが、これは失敗に終わった。その後佐賀藩に化学者として招聘され、有田焼きの改良に従事した。新政府の下ではお雇い外国人教師として大学南校や東校で物理、化学を教えた。また、ウィーン万博をはじめとする明治の博覧会事業には技術顧問として活躍した。
- ¹⁹ 竜池会は日本で最初の美術団体。明治20年(1887)に日本美術協会と改名し、現在も存続している。
- ²⁰ バックランドは英国の著名な地質学者 William Buckland (1784-1856) の息子で外科医・博物学者。魚の養魚の研究家として有名で、サケ漁業の視察官を務めた。
- ²¹ 伊藤圭介(1803-1901)は尾張本草学を代表する一人。父西山玄道について医学を修め、小野蘭山の門人水谷豊文について本草学を学んだ。シーボルトに師事して博物学などを学び、日本に初めて近代的植物法を紹介した。『泰西本草名疏』、『日本物産志』、『日本植物図説』他多くの著作がある。
- ²² 日本の本草学は江戸中期に新たな展開を見せ、広く一般の動物、植、鉱物等の天然物を対象とするようになった。蘭学や洋学の影響を受け、もともと漢方医学と不可分な薬学であった本草学は博物学的傾向が強いものに進展した。遠藤正治著『本草学と洋学—小野蘭山学統の研究』(思文閣出版、2003)を参照。
- ²³ 1873年に明治政府はロンドンで1871年より毎年開催されていた小規模の万国博覧会に、ウィーン万博の付属事業として参加出品した。史料として武田昌次「英国龍動府博覧会記事」『公文録、明治九年、第二十六卷、澳国博覧会報告書第二十三』(1876); 富田淳之(田中芳男、平山成信編)「明治六年英国経常博覧会参同之顛末」『澳国博覧会参同記要』(森山春雍、1897)がある。
- ²⁴ ドレッサーの *Japan* には Mr. Shōida of the Tokyo Museum (p.212) と記されているが、Shōida の誤りであると見なし、博物局工芸科の塩田真を選択した(下線は筆者による)。
- ²⁵ 日本書籍協会(編)『大久保利通文書』(東京大学出版、1928、復刻再刊:1983)、第六卷「三條公への建議書」、pp.465-482。
- ²⁶ 青木茂監修『竜池会報告』(竜池会、1885、禁売買、復刻版:ゆまに書房、1991)を参照。
- ²⁷ 『大日本美術新報』第1巻、第9号(鴻盟社、1885年)、p.18。ドレッサーが言う「工業上の三弊害」は石田為武の報告書『ドクトルドレッセ同行報告書』(1877年)に記述されたもので、要約すると、1)日本の工場は規模が小さい上に、製造する品種が

多すぎる、2) 製品が西洋の需要に合わない。3) 品質と価格がイギリスへの輸出に向かない。